特273-843
1200501128752
843

鹿兒島ことば 全

散史序
漁夫著

東京
櫻川閣藏版

始

特273
843

No 16880
No 16899

京都帝國大學圖書

鹿兒島ことば序

三千世界は廣し其國民言語の各相異あるは姑く措き此東洋の蜻蜓大なる我國にても全國同一言語を用ゐながら其言葉の種々なる偶〻相逢ふて談話すれは殆んと唐人の寐言を聞くと一般其事物を解せざるのみならず其意をすら解する能はざる者あり北奥州の淺く鼻にかゝり南九州の深く喉に出るもあり江戸ッ子のベランメイに上州のソーダンベイあり北國のゴザイミスキあれは中國のトヌケあり其他京都のヒ〻〻に江州のナマクラありて東西南北縣を異にし郡を異にし一山一川を隔てゝはや其音聲抑揚をかへ事物の名前よ

り諸種の言葉に至るまで自から相異ある者あり然れとも是必竟交通の十分ならさるより各其地方より土地風俗人情に隨ひ或ハ上品となり或は下品となり或は剛強となり或ハ軟柔となり或ハ鼻に或ハ喉に千種萬樣とハなれり然り而して其名詞働詞より形容接續の詞等其異あるところ一よして足らすといへとも之を要するに其最も聞き取りかねて唐人の寢言然たらしむるものは獨り抑揚と音聲となれハ聞く者專ら之に注意すれハ何れの鄕人に逢ふとして解せさることなし蓋し尠かるへきあり翠香漁夫薩州人士に交際そること最も廣く上貴顯紳士夫人令孃より下寒貧書生下女下男に至り其

聞くところの江戸ッ子流に異なる者を集め一卷を成せり此頃書肆の請によりて之を世に公にせんとし題して鹿兒島ことばといひ余に一言を求む余ハ草堂の一主人多く他鄕の人に逢ハそ薩摩方言の由來出所誤謬轉訛等を說くの知識と之を研究そるの閑を得そ聊か知るところを叙そるのみ唯惜らくハ文字の間其音聲抑揚を表ハす能ハされは是を見るもの以て薩州人士の談話を聞く如くならさると且つ言語ハ一地方に限らそ百姓町人より士人も上中下によりて各其品位を異にそれハ此書の都會田舍一般混同の者たれハ之を見るも の以て上下品位を分つの便あらさることを然れとも余聞く

九州ハ上古隼人種の裔にして薩州は平家の後胤ありとされハ世の博識諸士是によりて日本の古語古名を發明し其出所轉訛を知ること極めて容易ふして且つ薩州人士に交際を結ひ其貴顯紳士貴夫人令孃に近くの好方便を得るの最捷徑たるは余の信して疑はさるところあり

己丑の三月彼岸の中日春曇花を催その處
東都芝櫻川の草堂に於て　金城散史　叙

鹿兒島ことば

いき
いと
いがわ
いっせん
いしやう
いみしいひと
いま

咳（せき）
鱗（うろこ）
井戸（いど）
理髪處（かみゆひどこ）
着物（きもの）
吝嗇人（けちんぼうひと）
只今（ただいま）

翠香漁夫著

いんま
いーそとー
いものからのかんぴやう
いあい
いさてた
いたってみもろや
さがま
さしり
ばち〳〵け
はつでる

今（少し長き時）
勢を附る語
芋莖干
蟻
喧嘩した
行てみましよ
釜
流し
睫毛
盛出る

ばこう
はらぐい
はい
○凡てりハいふ通ふと知へし
はやそけ
ばちをかぶる
ばゝ
ば
にせさ
にき

爭ふ
雑談
針
爛徳利
罰があたる
街道（門外の）
三十歳許ノ女（小兒の呼時）
書生さん（女の語）
悪らしい

ばい
ほたいころぶ
ほたいをちる
ほいどん
ほんづがかけた
ほんがどんだのさ
へすき
へこにせ
へい
へい

蜻蛉
轉ぶ
落る
神主
時令鳥
本が澤山
灰そくい
書生（男子二十五歳迄）
灰
蠅

とりしまらん
どーぞたもんせ
どーそく
○凡てろ〻ぢに通ふと知るへし
どじやいこじやいあんさんが　どもこもならん
どくまん
どんこ
どんだふとかでこん
とごい
どしこ

思通りならぬ
何率被下（乞食杯の）
蠟燭
六萬
ひきげへる
れっそろしい太い大根
苓子
何幾

ときび
とっぽ
どげん
ちゑもと
ちごさん
ちゑちよ
ちんかんげた
ちめたい
ちゑっちん
ちやせん

玉蜀黍
六角になりたる手提灯
踵
箸
十二三の男兒
田舍にて父と言ふ時
駒下駄
つめたい
雪隱
さゝら

ちご
ちをちた
ちゐすと〜
ちゆゝゝ
ちよか
ちやちよか
ぢっぐん

小供（十五才まで肩縫上のある間いちごにて夫よりにせとある）
落た
勢を附る語（くしやゝの時よも用ゆ）
蝶々
湯涌
急備須
陸軍

ぢきじん　　琉球人

○凡てりハぢに通ふと知るへし

ちよちん　　堤灯（携堤灯）

ちやいで　　顋

ちん〳〵あバめろ　　徐かに片付よ

ちんこきっていれ　　小さく切て入れ

ちやくわや〳〵　　雀の啼聲

をとじい　　踵

をでじよ　　娘

をでじよだち、ちよとでち、みてみ

やれ、さくらどま、うたんバらから、

つきがハっでた、　　山陽外史の作歌といふ

をくろもの　　鍋

れふろ　　竈

ふしだしやったが　　立派に着飾りでした

おでいさま　　お娘様

おおをし　　杓子

をもどし　　飯杓子

をてもと　　箸

おはらかきやったグ　　お腹立でした

れすうさん　お師匠様
おかたりやいんか　お話しあされませ
おいどん　己輩
おいが　己が
おいわ　己い
おいどま　己達い
をとつ　弟
をせとこどや　恐怖所だ
をいこ　女の持物
をさいどやんしたあ　善こうお出あされました

をもしでー　面白い
をいん　御前
をづら　お重箱
をちゆし　れ銚子
をしよをけぼん　お茶盆
おせんづさま　佛様
をどもん　横着者
をごい　女小供
をこどよとゝくかよめどよ　白歯の下女をゝくか涅歯の下
をおくか　女をゝくか

おしよしよ　　燒酎
れこをたてる　　味噌をする
おだいやめ　　晩酌
おしよけ　　お下物
おそまし　　醬油
れさんの　　わあた
おんがめ　　蝗螂
れもて　　座敷
おかたトやげあ　　お婦じやうです（誰樣は何樣）
おまんさま　　町人より武士お向ひ

おひんぼ　　物おしみ
おいだで　　おにごっこ　（子供遊ひの）
おじやんそか　　お出あさいまそう（人の家を案内そる時）
をいで　　返事（案内を乞われし時）
をせ　　長者
をまへのいふこちや　　お前のいふことわからん
あつちやをちん　　我輩
わがさい
○凡てがきぐげごの音おしと知るべし

わらいたぐる
わっこいどこかねー

わざいしこ
わせいも
ひらべ
わくどう
がられる
かるかん
かん

十四

十分よ笑（或ハ嘲弄する
お前ハ何處かへ（馬方樣お
もの〳〵）
澤山
さと芋
蕨
ひき蛙
叱られる或ハ怒られる
菓子の名（饅頭の皮の如き者）
羊羹に似たる者

がね
からいも
がっつい
かあちよか
かっかこうこう
から〳〵
かんざけ
かせひきがひっついた
かどいし
かのこ

蟹
蔭摩藷
丁度
鉄瓶
雞の鳴聲（闔家孝行といふと）
銚子
酒（酒ハ常に燒酎をいふ）
風を引いた
燧石
子子

がーろ
がーすっぺ
かくれご
ぐいしづら
かたせてたもさんか
かん〳〵ぼ
がっかうせいたきた
よー
よしか
だんぼ

かつぺ
水主
かくれんぼ
瘢面
交てかくれ（遊びの時）
しーわんぼ
學校へ行て來た
返事（朋輩同士）
木菟
洋燈

○凡てらりるれろはだぢでづどに通ふと知るべし

たんご
たましきゝ
たかんばっち
たれ
だんざ
たちわけ
たびな
だれた
だてこき

手桶
賢き人
竹皮笠
盥
狸
あた大豆
田螺
草臥た
飾る人

だんかさ　蝙蝠傘
うげなこつ　其様なと
うじでゐもか　左様でございますか
うや　左様かへ
うーぎよらんでもいトやお　そーかいひあさらんでもいー
わはんか　じやこざいませんか
うら　たゐし
うま　蕎麥
うり　剃刀
うーでどんからバ　うーだけれど

つろ　燈籠
つろ　釣堤灯
つどどん　東郷殿
つ　○とい○つに通ふ時ありと知るべし
つ　甲（龜の甲の類）
づたんバら　瘡蓋
つたっくるぐ　山腹
つぐわ　打擲
つおとだあし　唐瓜
仕事半天

づでかぎ　鈎（爐上用）
づでたけ　竹（鈎をさげる竹）
つくらとけい　懐中時計
つばくらめ　燕
づんばい　澤山
ねよ　母（田舎にて）
ねぶ　根深
ねぶかいだお　目隠し
あんちこつかい　何といふ事ですか
あんきん　紫芋

あんど　奥の間
なきべす　よく泣く奴
うっそばてちふばめきてねー　善しやべりてねー
うつらん　判らん
うすにわ　靴ぬぎ（入口の）
うとっぱらがいたい　腹がいたい
うりをひんな　虚言をいふな
のん　蚤
くねぎ　香橙
くつ　龜

くしやく　柄杓
くづ　靴
くせみ　くしゃみ
ぐわを〳〵　犬の吠ごゑ
やゐうち　灰吹
やまおこ　天秤棒（先の尖りたる）
や　返事（見上たる人に）
まっときゃどもをかたりやはんか　尙少時お話しなされませ
まいぶるす　麵包に似たるもの
まねた　俎

まだたぎつちよ｜る　まだ熱い（乾物を入れたる時に）
まおか　雪隱
まだうごつごゐんすぞ　まだ澤山あるまそ
まっじょ　下女を呼名の一ッ（二つあり）
まかりでます　玄關より案内の語
けうい、いっぺろっぺさるい　今日は彼處此處あるいてそっかり疲れて、ほう
て、そったりだれて、ほろ　つとした
ほっとした、　貝
け　下駄を穿く
げたをふむ

げゐのこ　蛙子

○凡てるゐゐは通ふと知るべし

けをいば　横着者

けこじよのめ　蚕の繭

けっさりいを　腐り魚

げきがふっさた　風引た

げしのこ　蛙子

ぶゑんざらい　御無沙汰廻り

ふんごん　玄關（中以下の士方に）

ふたぶら　頬

ふてい　太い

ふをま　唐紙

ふだうち　家來

ふろまめ　十六さゝげ

ふもと　郷中の士族の集りたるところ

ふし〳〵　吹革

ふた　頬

ぶっくりげた　低き下駄

ぶゑんあいを　鮮魚

こじゆさん　奥様（下女などゞ）

こぢいしよ　甲斐〻しく
こゝづいみました　此處迄見ました
おとせんのうござんしつろう　お淋しゆうこざりましたでしよ（妻より夫などよ）
ごだぜん　郷田殿
こけゝ　此處へ來よ
こやいちばんうめど　是は一番旨いぞ
おれいをする　御禮をする
ごれいをもうしあげやらんか　お禮いわあいのか
ことろしいして　澤山

ごんご　五合（半里をいふ）
こん〳〵くわいー　狐の鳴聲
ごにー〳〵　赤子の啼聲
こび　昆布
このそとくを　梟
こゑ　年魚の小さき者
こづころ　つましい人
こんごにからふ　脊中に負ふ
ゑんず　豌豆
にのそ　袖子

てばめ〳〵　喧語
てご　猿
てのはら　掌
でぐわん　かゝへ男
てのげ　手拭
あらよ、んだもん　あら（驚きて）
あざしを　奇麗な語
あいた〳〵　熱い〳〵（湯に入りて）
あいがきんたまい わざいう　彼のへのこはいらい太い
どだ　兄
あにより

あそけて　見物に行ふ
あど　踵
あまいがち　徒らっ子
さるく　歩行
さしげた　足駄
ざっつ　座頭
さんしも　山椒
さそ　天秤棒
きい　錐
きっさねー　きたない

きのって
きのこ
きしゞん
ぎをいわんそな
きど
きよくる
ゆがたぎる
ゆくさをじやんした
ゆたて
めらんつ

昨日一昨日
椎茸
俎
彼是言ひあさるな
表（門の外）
巫山戯る
湯が沸く
善てうお出なされました
鮴
處女（へこにせ抔が）

めしげ
めぐりのいゝひと
めご
めげ
めいわけまそ

みんなゞ
みやん〳〵
しちよる
じゆいし

飯杓子
怜悧の人
茶盌（茶碗をふせをく）
眉毛
お頼みもうしまそ（案内のことゞ）
耳
猫の聲
爲て居る
料理人

しい
しよしやもの
して
しらが
しよく
しゝめげ
しよもぢ、よんけいこ
しんせん
しん〳〵ぐゑ
びのとれん

臀
しやれもの
額
生絲
机
蜆貝
書物讀に行ふよ
知らぬ
四十雀
氣の利かぬ

びうどん
びき
びんた
びんだれ
ひをこし
ひかき
ひる
ひざつぶし
ひつ
ひゞる

別府殿
蛙
頭(何物よても)
調水盥
火吹竹
じうのう
蒜
膝
長持
雲雀

ひため
びんたぶっど
ひたびら
もちけ
もっちけ
もがさつら
もっちよドやったもし
もーよか〳〵
もーよかど
もがみ

虱
頭いるぞ
臀
持つて來よ
持つて行け
じやんこづら
持つてを出下され
もうよろし
もういらいなよ
豌豆

せんしよする
せんドよ
せんもと
せご
せび
せびつ
せつち
すあり
ずつけん
ずし

めかそ
下女を呼ぶ名のひとつ
かれぎ(葱の類)
鱸
蟬
米櫃
鶯のまだ鳴ね時ゝ名
蟻
頂上
飯よ野菜類を入て焚きたる者

んぼ

婆（ばー）（五六十歳（としより）寄の女（おんな））　三十六

明治二十二年四月十一日印刷
明治二十二年四月十三日出版

編輯兼發行者　東京府士族　戸田翠香
東京芝區櫻河町二番地

印刷者　東京府士族　山崎清直
東京麹町區有樂町三丁目一番地

大賣捌所　東京府平民　臥龍堂
東京芝區琴平町二番地

仝　東京府平民　春陽堂
東京日本橋區通り四丁目

仝　小川寅松
東京京橋區南紺屋町一番地

版權所有

終